黒岩重吾

訣別の時

訣別の時

黒岩重吾

新潮社

訣別の時

黒岩重吾

印　刷　1977. 12. 15　発　行　1977. 12. 20

発行者　佐藤亮一
発行所　新　潮　社
東京都新宿区矢来町71
郵便番号162／振替東京 4-808
電話業務部(03)266-5111／編集部(03)266-5411

印刷所　二光印刷株式会社
製本所　神田加藤製本株式会社

定　価　980円

© 1977 Jûgo Kuroiwa, Printed in Japan

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

訣別の時

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

あれからもう三十年近い歳月が流れた。

終戦後初めての株式ブームは、昭和二十三年から二十四年の半ばまで続いた。相場が過熱した時は、株を買う人々が北浜に殺到し、店内に入り切れないことさえあった。

道端では大勢の客が店の窓に鈴生りに群がり、刻々と変る株価に魂を奪われていた。

そういう相場界に身を投じた尚吾は、その生活も含めて、阿鼻叫喚の灼熱の坩堝で踊り狂いながら、日々を過したのだ。尚吾はその坩堝の中で、熱気で跳ね、火傷を負いながらも、華麗な虹を夢見たり、消えた虹の後に、人間の錯乱の牙によって抉られた、暗黒の深淵を覗き見たりした。

それはまさしく大博奕の修羅場での一日一日だった。だからといって尚吾は、灼熱の坩堝で踊っていた当時を悪夢とは思わない。

そこには相場というディーモンに対する対決があったし、時代の価値転換の中で共に踊った仲間達とぶつかり合いながら、裸の人生を論じることが出来たからだ。

ディーモンと対決したことによって、尚吾は間違いなく傷だらけになったが、得たものも大きかった。

それは何物にも換えることの出来ない強靱な生命力と、創作への決意だった。その両者によって尚吾は北浜から去ることが出来たのである。

当時、尚吾達が昼休みに腰を下ろした中之島公園の川には高速道路が出来、青いドームを屹立

させた赤煉瓦の高等裁判所は、瀟洒な近代的なビルに変っている。
北浜の傍にある難波橋の下を往復していた石炭船の姿も今はない。そして焼野ヶ原に近かった川岸には巨大なビルが立ち並んでいる。だが今、難波橋の上に立つと、股間を拡げ、眼を血走らせながら、放尿している仲間の顔が鮮明に脳裡に浮ぶ。悠々と放尿しているのではない。彼は三等巡洋艦の砲術指揮官になり、見えない敵艦に向って必死で射撃しているのだった。
だがそれが如何に必死な姿であろうと、過去の幻との対決からは絶対に人間のロマンは生れない。それを知ったが故に、尚吾は北浜と訣別したのだ。

昭和二十三年三月、尚吾の父は、大阪の郊外に建てた自宅の風呂場で倒れ、殆ど意識不明のまま一週間、裏庭に面した六畳の部屋で横たわっていた。煙草も喫わず、酒も余り飲まず、真面目な電気技師として生涯を過した父は、五十三歳の人生を終えようとしていた。
昭和十七年の春、勤めていた日本発送電から、マレー半島のクアラルンプールに派遣され、発電所を建設し、十九年の秋、奇蹟的に輸送船で帰還して以来、父はその年齢になって母の影響を受けて、クリスチャンになった。そして終戦後は教会に通い、難解な神学の本などを読むようになっていた。クアラルンプールに行くまでの父の唯一の趣味は謡曲であったのだ。
先ず間違いなくアメリカの潜水艦によって撃沈される輸送船に乗ったにも拘らず、無事帰還出来たことが、父の心境を変えたのかもしれない。だがそんな父にも死ぬ間際まで変らなかった奇妙な健康法があった。
それはN式健康法と呼ばれ、その原理は、心臓は自己の力で血液を循環させるのではなく、他動的に動いているに過ぎない、という荒唐無稽なものであった。何時頃から父がそれを信じるよ

うになったか、尚吾は覚えていない。ただ小学校の高学年の頃から尚吾達家族はベニヤ板に寝かされ、風呂に入る場合は、湯槽と水槽につかることを強制された。

父に対する尚吾の反撥は、その頃から始まったようである。尚吾は徹底的に父に反抗し、父との間に深い溝が出来た。昭和十九年三月、尚吾は大学の法学部に在学中兵隊に取られ、満洲に征った。昭和二十年の冬、尚吾はソ連軍の捕虜にならず、奇蹟的に日本に戻って来た。当時の言葉で復員という。

帰還してみると、クリスチャンになった父は確かに人間的な深さが出来ていた。N式健康法も家族に強制せず、自分だけ黙々と実行していた。

二十三年の春、父は風邪を引いたにも拘らず、医者を拒否し、風呂に入った。湯に五分間つかり、それから水槽に五分間つかる。それを何度も繰り返すのだ。若くて健康な者にとっては身体を刺戟するという点で、考え方によれば効果があるかもしれない。だが父は病人だった。水槽から湯槽に移った途端、父らしくない唸り声を上げて昏倒した。

湯加減を気にしていた母が、その唸り声を耳にして、父の異常事態を知った。

医者の診断では、脳溢血だった。萎縮していた血管が湯に入った途端膨張し、脳の血管が破れたのである。

尚吾が自分に対する父の愛情を確認したのは、意識不明の父が、時々譫言で、

「尚吾の就職はもう決ったか？」

と母に問い掛けるようにいうのを耳にした時だった。昨年の九月、大学を卒業したものの、尚吾は学生時代の闇屋気分がまだ抜けず、就職もせずに、ぶらぶらと日を過していたのだ。復員した尚吾は二十一年、同志社大学の法学部に復学した。戦時中軍事教練に熱中し、軍国主義を謳歌していた学生達は、もう戦争のことなど忘れたように一流会社に入るべく、勉学に熱中していた。

尚吾は学友達の変り身の早さに唖然とした。そんな時尚吾は、失恋した。戦争に征く前から交際していた矢田令子である。尚吾は学校に行くのが馬鹿らしくなり、闇屋になって放蕩な生活を送ったのである。だがそんな生活にも飽き何となく大学を卒業した尚吾は闇屋気分が抜けない、というより将来、如何に生くべきかを模索していたのかもしれない。当時、尚吾は闇屋時代とは人間が変ったように家に閉じ籠り、外国の文学書を乱読していたのである。

尚吾は父の譫言を聞いた日、慌てて新聞の求人欄を見た。

徹底的に破壊された日本も昨年あたりから、漸く国民生活の安定に向って生産が復興し始めていたのである。

例えば機械工業の生産回復度は、昭和二十一年、五一・四、二十二年、五九・八、二十三年、一〇七・四、金属工業は、一五・六、二三・二、四〇、産業活動は、三九・二、四六・二、六一・八（経済審議庁資料）である。また鋼船建造実情は、貨物船の場合、二十一年、二十一隻、二十二年、三十三隻、二十三年、七十一隻（ダイヤモンド社「造船」より）と増加している。つまり昭和二十三年は、廃墟と化した日本経済が、飢えた人々の必死の働きにより、生産の向上を目差して立ち直り始めた年であった。実際、尚吾が卒業した二十二年九月の学生達は、金融機関、繊維会社、電力会社、薬品会社などに数多く就職していた。

尚吾がそういう就職組を尻目に眺めながら、どの会社の就職試験も受けなかったのは、自分の性格が、サラリーマンに向いていないのを知っていたからだ。

それは尚吾が、人生に対して純粋なせいではない。生れながら、集団生活の中では生きて行けない強烈な個性の所有者だったからである。

戦争、敗戦、そして廃墟という日本の激動期を経て尚吾は、己れの中に潜んでいるエゴの強烈さと、他人のエゴと自分のエゴが、本質的に違っているのを認識するようになっていた。勿論二

十四歳の尚吾は、自分が持つ生命力のエゴが、集団の中では抹殺され、己れの存在価値が崩壊することを、はっきり認識していたが、どういう場に於て、ロマンの花に転換出来るか、分っていなかった。

人々が飢えている時代に、就職もせず、文学書を読み漁っていた尚吾は、無意識のうちに、ロマンの花を咲かせる場を模索していたのかもしれなかった。

尚吾の父は先にも述べた通り、サラリーマンである。蓄財は殆どない。尚吾が小学校六年生の時建てた、敷地八十坪、建坪四十坪の平家建ての家が、唯一の財産といって良いだろう。終戦直後の食糧危機を一家が何とか乗り越えられたのは、父が神戸のM発電所の所長になり、電力を利用して、海水から塩を作ったせいである。

その塩を尚吾は学生時代売って歩いたのだ。それで知り合った仲間達と組み、闇で儲けた金の一部を家に入れ、また、母が茶華道を教えていたことも役に立った。

父の譫言は、尚吾への愛情だけではなく、真木田家の将来に対する不安感も混っていたかもしれない。だが死を前にした父の譫言に、尚吾は意識して、父との溝を埋める骨肉の愛情の土砂の雨を降らせたのである。これが最後のチャンスだった。

求人広告欄には尚吾が知っているような有名会社はなかったが、一つだけ尚吾の眼を惹いた会社があった。K銀行と同じ名前を持つK証券であった。しかもK証券が求めていたのは調査部員だった。証券会社は当時の尚吾の認識によれば株屋であった。

株に対して尚吾は全くの素人だったが、尚吾の血は沸騰した。尚吾は、証券会社という文字の中に、巨大な賭け事の修羅場を感じたのだ。

株屋、これこそ俺が求めていた世界かも知れない、と尚吾は喰い付くように求人欄を睨んだ。父の譫言が、尚吾に生きる場を与えてくれたのだ。これこそ、死に瀕した父の本当の愛情かもし

れない、と尚吾は昂奮した。
何という身勝手なエゴ的な昂奮だろうか。
尚吾は何かに憑かれたように履歴書を書き、その日、大阪の中央郵便局まで行って、速達で履歴書を送った。
三日後、南の八畳の間に面した小さな庭に植えられていた桜の花が、恥じらうように淡紅色の花弁を開いた。もの憂げな春の陽が、ガラス戸越しに、四十坪の家にしては幅の広い表縁に差し込み、父が愛用していた紫檀の机に置かれた、ベルナールとその時代、という古びた書物の染みを浮き上がらせていた。
その書物は牧師だった尚吾の母の父が訳したものである。
だが襖で遮られた隣の六畳の部屋は暗かった。父の周囲には、医者と母、尚吾と弟妹が沈痛な面持ちで坐っていた。
父が危篤状態に陥ったのを医者が告げてからすでに半時間は経過していた。暗蒼色の父の顔には、誰にでも分る死相が表われていた。父は眼を閉じていたが、時々何かいおうとし口から泡を吹いた。その度に尚吾は、父に向って、就職先が決まった、と大きな声でいった。自分の言葉が混濁した父の意識の残滓に通じるように、尚吾は必死に念じていた。その時、奇蹟が起きた。
一瞬、父は意識を取り戻したのだ。
「そうか、決まったか、K銀行の系列会社だな、固い会社だ」
それが父の最後の言葉であった。
最後に甦った父の意識が把握したのは、絶えず自分に対して背いて来た尚吾が、固いことで有名なK銀行に就職が決定した、という喜ばしい報告だったに違いない。
電気技師として、謹厳実直な人生を歩き続けて来た父が望んでいたのは、長男である尚吾が、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

堅実な一流会社のサラリーマンになることであったのだ。だからこそ、K銀行という言葉だけが刻印されたのである。

もし父が、尚吾が株屋に就職したのを知ったなら、父はクアラルンプールから持ち帰り、宝物のように珍重していた、中国の古い文鎮を振り挙げたに違いなかった。

父の葬式が終った夜、尚吾は日記用に使っていた大学ノートに、次のような一文を書き綴った。

……父の死に際し、俺は父に対する借りの大半を返済した。それを為し得たのは運命の神の加護であろう。願わくば、その加護が、採用試験が終るまで続かんことを……

今、思い出すと汗顔の至りであるが、その時、尚吾は祈るような気持で、その一文を書いたのである。

何故その夜、そんな一文を書いたか、というと、その日、K証券から入社試験日を指定した文書が配達されたからであった。

入社試験日は五日先であった。卒業試験に通るため、経済学に対する勉強を一夜漬けに近い形でしたことはあるが、尚吾は、株に対する知識は殆ど持ち合せていなかった。

尚吾は、試験日まで毎日中之島図書館に通い、終戦後から現在に到る株式界の実態を、主に新聞で勉強した。その結果、証券民主化ということが、株式界の最大の問題であることを理解した。

それによると、日本が第二次大戦を起こしたのは、軍部と財閥の野望の結果であり、日本に進駐した連合軍は、日本経済の民主化を目差して、農地改革、労働改革と共に、財閥の解体を実行した。そのためには、財閥会社の持株を個人に放出せねばならない。

つまり財閥の独占株主に代り、個人が株主になることが、証券民主化なのであった。

財閥解体や、財産税として物納された株式は膨大な量になり、二十二年前半には、約二百五十億円の株式が処分されることになった。

その機関として二十二年六月ＳＣＬＣ（証券処理調整協議会）が設置された。
そしてＳＣＬＣはこれ等の財閥株を、証券会社を通じ、一般株主に公開したのである。証券会社としては、まさに千載一遇のチャンスである。民主化という言葉は、敗戦後の日本に於てはゴッドの宣託のようなものだった。証券会社は、ＳＣＬＣによる財閥株放出を、証券民主化というキャッチフレーズに置き代え、一般大衆に株を売ったのである。
そして進駐軍総司令部、日本政府はこれを大々的に支援した。二十二年の十二月には、東京の日本工業倶楽部で、証券民主化運動の全国大会が開かれた。そして全マスコミを通じ、民主化運動を盛り上げたのだ。
いうまでもなく、日本の一般大衆は、敗戦後初めて、恐怖的なインフレを味わい、信頼していた紙幣が、如何に価値のないものであるかを知った。一般大衆は紙幣、つまり金を物に換え、更に証券民主化運動の波に乗って株を買った。こうして株界は二十二年の十二月あたりから活況を呈し、二十三年に入ると、隠匿物資を売った成金や、闇ブローカー、そして闇米を売って儲けた農民達が、雑嚢の中に金を詰め、下駄ばきや、長靴をはいて株屋の店頭に現われるようになったのである。
尚吾が新聞記事によって得た知識は大体そんなものだった。五日間で、株の詳しい売買方法までは会得出来なかったが、それ等の知識によって、Ｋ証券が調査部員を、新聞広告で募集した理由は納得出来た。
つまり株屋は、戦前のような、プロやセミプロ相手だけではなく、一般大衆を相手に、大きく飛躍しようとしているのであった。
試験日の前日、図書館を出た尚吾は、ひょっとすると、Ｋ証券は一人や二人ではなく、かなりの社員を採用する積りかもしれない、と感じた。

石の階段を下りた尚吾は、多分、もう当分来ることはないだろう、と思いながら図書館を眺めた。図書館は赤煉瓦の高等裁判所や古びたK病院が川畔に並んでいる堂島川に掛った石の橋の傍にあった。その図書館は関西財閥の元祖といっても良い住友吉左衛門が寄附したものだった。ローマ寺院を思わせるマルシャンオーダーの柱のついたルネッサンス式花崗岩造りで、青錆びたドームの三層楼に春の西陽が当たり、花崗岩の部分が薄い朱色に染っていた。財閥解体か、と尚吾は何となく口の中で呟いてみた。亡き住友吉左衛門の霊は、どんな思いで、現在の日本を眺めているだろうか。少なくとも、この図書館には軍隊の匂いはなかった。

もし財閥が、その巨大な富を益々膨ませるため軍部を利用したとしたなら、それは悲喜劇以外の何物でもなかった。尚吾は戦時中、飛行機製造工場に勤労奉仕に行ったことがある。そこで初老の工場長が、監督官として軍から派遣された若い大尉に、頭ごなしに怒鳴られているのを見た。財閥が利用しようとした軍隊は、戦争が悪化すると焦燥感に駆られ、銃の威力で財閥を顎でこき使っていたのである。飛行機製造工場の工場長といえば、会社の専務か常務クラスである。財閥の一員だったのだ。

図書館の隣には中央公会堂があった。赤煉瓦のその公会堂は明治、大正時代の相場師、岩本栄之助が私財百万円（現在の三十億）を大阪市に寄附して建てられたものだ。だが公会堂の基礎工事が始まった頃、岩本栄之助は相場に破れ、莫大な借金を拵え、ピストルで自殺を計った。そして川向うの回生病院に収容され、自分が寄附した公会堂の建設工事を眺めながら亡くなったのだ。その話は尚吾が株屋に勤めるようになってから知った。それを知った時、尚吾は或種の感動を受けたのは事実だった。

だが尚吾はその時、俺は幾ら金を儲けても、公会堂などを寄附したりはしないだろう、と思った。尚吾の夢は船を買い、ヘミングウェイのようにアフリカに行って猛獣狩りをすることだった。

大阪の株式市場である北浜は中之島公園の南に隣接していた。中之島公園は堂島川と土佐堀川に挾まれ、東西に長く伸びた島であった。先にも述べたように、灌木の木立の中に図書館や公会堂が建っている中之島公園には、明治、大正期の舶来文化の残り香が、何処かに漂っていた。それは図書館の三階にまで届く銀杏の巨木が、無数の枝を拡げ、西陽を受けるとその影が、網の目の刺繍にも似た模様を赤煉瓦の壁に縫いつける風景一つにも表われていた。

だが川の南側、北浜の街には、文化の片鱗も、人間精神の余裕もなかった。

北浜の街の表通りには、その街で生きている人々が白亜の殿堂と自画自讃している豪華なドームの取引所の建物が腰を据えている。

そして、取引所を中心に、大小の株屋が蜘蛛の巣を張り巡らしたように並んでいた。

それは金を貪り取るため無数の手が乱舞する喧騒の街にふさわしく、不調和そのものであり、到るところに人間の浅ましい欲望が、恥ずかし気もなく顔をむき出していた。

鼠色に似た壁と古い屋根瓦の株屋は明治以前の両替屋に似ていた。そしてそんな株屋の隣には大資本の証券会社が建てた鉄筋五階建のビルが己の資金を誇るように空を睨み、証券民主化の垂れ幕が掛っている。

空地を囲った板塀の前には、明日の株価の騰落を予想している罫線屋が、客を集め、細い竹竿で自分が作った罫線を差しながら、大声を張りあげていた。罫線屋は予想株価の表を一枚百円で客に売っていた。

その隣には白い顎鬚を生やした易者のような男が、彼が書いたとは信じられないような墨の達筆で、相場道の真髄を説いた看板を立て、ガリ版刷りの自著を一部百円で売っている。

また電柱には、十二支を図表で示した易暦が貼りつけられていた。

茶道の師匠のような頭巾を被った易者が、客の手相を観ている。北浜の易者は、客が何を求め

ているか知っていた。相場の運勢なのだ。客は百円の易料を払いながら、家族のことや、愛情問題については一切質問しないし、また易者も、そういうことには触れなかった。

それ等は当時の北浜の性格を端的に表わしている。客に取って民主主義の中で生れた証券民主化という新しい言葉は、総司令部と証券会社の新造語に過ぎなかった。そういう大義名分の許で、客が求めているのは、相場で金を儲けるということ以外、何もなかったのだ。

K証券は高麗橋筋にある有名なMデパートの近くにあった。戦後建てられたのだろう。白いコンクリートの四角い二階建のその店は、泥臭い他の店と異なって、背後にK銀行が控えていることを、古びた株屋に誇示しているようだった。珍しいガラス戸の傍の白い壁に、取引所正会員、という真鍮の会員証が、毎日磨かれているのか眩しいほど光っていた。取引所正会員、という会員証がある以上、非会員の株屋もある筈だった。

尚吾は、今、巨大な賭博の街にやって来た、一種異様な昂奮に、見るもの総てが珍しかった。応募者は十人ばかりで、大体尚吾と同年輩の者ばかりだった。募集条件は、二十二年以降の大学、高専卒業者だった。高専というのは、五年制の旧制中学校を卒業し、更に三年間、専門の知識を得るための学校だった。有名な専門学校になると、尚吾のような私大卒業生よりも頭が良く、専門の知識を身につけている。

実際尚吾は、学生時代、闇屋をやったり、文学書を乱読したりしていたので、専門的な知識は殆ど身につけていなかった。

集っている連中は、学生服の者も居たし、背広姿の者もいた。腕を組んでいる者、昂然と胸を反らせている者、脚を組み俯いている者、応募者の姿勢は様々だったが、尚吾はそれ等の若者に、共通した或感じを受けた。

それは彼等が尚吾と同じく、戦争体験者である、ということだった。中に三、四人学生服を着、

真面目な顔で坐っている者が居たが、多分彼等は、二十三年三月高専を卒業したばかりで、軍隊に取られていないだろう。

戦地に征った応募者と、征かない者との間には、尚吾が肌で感じ取れる違いがあった。

学徒兵として軍隊に取られた者は、傲然と構えていたり、正反対の投げ遣りな姿勢で、採用も不採用も時の運だ、という虚無的な翳りを漂わせていた。尚吾は身体が小さいだけに昂然としていた。身長百六十一センチ、体重五十キロの尚吾は、軍隊で完全軍装をさせられた際、小柄であることのハンディキャップを、嫌というほど認識させられた。それが尚吾の勝気さにミックスし、人生に対して挑戦的な姿勢を取らせた理由の一つかもしれない。身長百六十一センチ、体重五十キロといえば、戦前の日本人の平均体位に近い。普通ならコンプレックスを感じることはなかった。だが尚吾は生れながらに病弱であり、小学生時代には虚弱児童という烙印を押されていた。青年時代苦学生だった父は、毎朝午前四時に起き、牛乳配達をしたらしい。車を引いて五キロの道を走るのである。父の胸は大きく肩幅は広かった。父は尚吾の虚弱な身体に腹を立て、鍛えろ、自分で鍛えろ、と絶えずいい続けた。そして小学校五年生の時、尚吾は突然、自分の意志に反し、虚弱児童ばかりが集る、六甲郊外学園に半年間放り込まれたのである。尚吾にとってそれは酷いショックだった。尚吾は父を恨み、自分の身体を憎むようになった。その少年時代の原体験は、大人になっても消えなかったのだ。

尚吾の傍に、紺サージの背広を着た、尚吾と同じぐらいの小柄な男が胸を張り、煙草を喫っていた。彼は左隣に坐っている背を曲げた何処か投げ遣りな男と、時々親し気に話し合っていた。会話の口調から判断すると友人同士らしかった。二人の会話の内容は採用試験とは全く関係がなかった。背を丸めた方の男の細君が妊娠し、堕すかどうかを話し合っていた。紺サージの男は、しきりに堕すように忠告していた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com